■テーマ展

夏休み！自然探検大図鑑

会期　平成15年7月23日（水）～8月31日（日）

豊かな自然を象徴するブナ林

まずは野山に出てみましょう！

近年、自然保護や環境保全という言葉が、いろいろな場面で取り上げられています。しかし日本の各地をおおっていた森林は、既にかなりの面積が消失してしまい、そこに生活していた多くの生物も姿を消し、野生生物と身近に接することができた時代が今や遠い過去になりつつあるようです。

自然保護を考えるとき、何が大切なのでしょうか。書物や専門家の話を聞いて勉強することも大切なことですが、実際に野や山に出かけ、自然を自分の五感を使って確かめることに勝るものはないでしょう。そして夏は、野生の生物たちを観察するのに最適な季節です。まず、自然と付き合ってみることから始めませんか。今回のテーマ展が、そのお手伝いをします。

ブナ林のクマゲラ

では、今回の展示の中からいくつか紹介しましょう。

夏の到来を告げるカッコウ

世界には約9000種の野鳥がいて、日本では590種、岩手県では341種の野鳥が確認されています。春に渡ってきて繁殖後夏を過ごし、秋に南方へ渡る野鳥を「夏鳥」といいます。しかしここでは、１年中みられる野鳥(留鳥)も含めて紹介します。

山の中で野鳥の調査のためにテントを張っていると、野鳥は早朝3:40分頃からさえずり始めます。アカハラを筆頭に、キビタキなど上からも下からも横からも、そして斜めからもさえずりがふりそそぎ、森じゅうが野鳥の楽園となります。

しかし、夜中から騒いでいる野鳥もいます。「ジューイチッ！」と鳴くカッコウの仲間（ホトトギス科）のジュウイチです。名前のとおり11回鳴くのかなと思い数えてみたら、30回以上鳴いていました。ホトトギス科の野鳥は、ツツドリ、ジュウイチ、ホトトギス、そしてカッコウの順で渡ってきます。ですから、カッコウが渡って来ると、いよいよ夏到来といった感じがするのです。

夏は虫たちの楽園

強い日差しが照りつける真夏は、多くの昆虫たちが命を輝かせる活気に満ちた季節です。セミたちの大合唱、カブトムシ、クワガタムシなど多くの甲虫類も夏の風物詩として欠かせない存在です。

夜には灯りに誘われて、ガをはじめとするたくさんの虫が集まってきます。また、闇にまぎれて、どこからともなくやって来た１匹の力に悩まされ、寝苦しい夏の夜を過ごしたことはないでしょうか。いずれにしても、夏と昆虫は切っても切れない関係にあることは確かでしょう。

展示では、岩手県産の昆虫を中心に、カブトムシやクワガタムシはもちろん、トンボ、セミ、チョウも多数展示しています。また、ふだん目にすることがなかったり、あまり知られていない昆虫も展示していますので、昆虫の多様さを実際に目で見て感じてください。さらに、外国産の珍しい甲虫、美しいチョウなども展示します。

個性豊かな夏の花々

北国では、短い夏を最大限に利用しようと、さまざまな植物が次々に花を咲かせます。展示では、岩手で見ることができる代表的な夏の花たちを紹介しています。

まずは最も身近な、町や里の花たち。ここではビロードモウズイカやオオハンゴンソウ、オオマツヨイグサなどの帰化植物が幅をきかせています。

雑木林の花　ヤマオダマキ

雑木林へ行くと、少し変わった形や美しい色の花が見られます。ヤマオダマキやヤマジノホトトギスなどには、どうしてこんな形になったの？ときいてみたくなりますし、ヤマユリやソバナ、イチヤクソウやフシグロセンノウの可憐な姿を目にすれば、夏の暑さもしばらく忘れてしまいます。

さらに森の奥へ入れば、ひっそりと咲いているサンカヨウ、トチバニンジンなどに出会えるかもしれません。

アルビノのツキノワグマから環境を考える

2001年に、盛岡市簗川（やながわ）地区に現れた白化型（アルビノ）のツキノワグマが話題をよびました。岩手県でこのアルビノのツキノワグマが発見されたのは6例目で、すべて北上山地に限られています。アルビノの出現率は、2万頭に1頭の割合ですから、計算上は12万頭のツキノワグマが生息していることになります。しかし実際はそれほどの数はいませんから、開発の結果、個体群が分断され孤立し、近親交配が進行しているものと考えられます。動物たちが交流できるアニマルロードの構想の実現が、待ち望まれます。

今回は、住田町で捕獲されたアルビノのツキノワグマとその子グマの剥製を展示しています。このクマから、岩手の自然環境について考えてみてはいかがでしょうか。

野外の危険な生物

ハイキングや登山など、野外ではクマや毒ヘビ、ハチなど様々な生物に危害を加えられることがあります。でもむやみに恐れるのではなく、危険な目に合わないように正しい知識を持つことが大事なことです。今回の展示では標本や写真、対処法などを解説していますので、野外に出かける際に参考にしてください。

「危険」といってまず思い浮かぶのが、毒ヘビでしょうか。代表的な毒ヘビといえばマムシですが、マムシより毒性が強かったにもかかわらず、以前は無毒ヘビだと思われていたのがヤマカガシです。マムシと違い人間の姿をみると逃げていくため、おとなしく無毒と信じられていたからです。ところが1982年に岩手県都南村で保育園児がかまれて死亡したことから、毒ヘビだということがわかりました。

毒ヘビやクマよりも恐いのが、スズメバチの仲間です。野外で出会う可能性はハチの方がずっと大きく、毎年数十人もの死者が出ていますので決して油断はできません。

動物の血液を吸う昆虫もなかなかやっかいなもので、ブユ、アブなどはしつこく攻撃してきます。ガの幼虫のうちのいわゆる「毛虫」の仲間では、うっかり触れるとかぶれてしまうドクガ類、刺されるとかなり痛いイラガ類も要注意です。

植物の中で強い毒をもつ種類として最も有名なのは、トリカブトでしょう。トリカブトを含むキンポウゲ科の植物は、山菜や薬草として利用されるものもありますが、強い毒性をもつものも多いのです。よく知らない植物をむやみに口にするのは、避けるべきです。また、触るとかぶれる植物の代表は、ウルシの仲間です。触れてから症状が出るまでに時間がかかり、人によって症状に差があるので、原因がわかりにくいことがあります。

夏の甲虫類

刺されると痛いナシイラガ幼虫

この夏は自然探検に出かけよう！

今回のテーマ展「夏休み！自然探検大図鑑」は、虫、鳥、花などの野生生物を通じて自然への接し方を楽しく学習・体験できるように構成されています。展示資料は、当館が誇る鳥獣剥製の数々、昆虫や植物の標本や写真などいずれも貴重なものばかりです。また、テントやコッヘルといったキャンプ用品から顕微鏡や捕虫網などの調査用具、図鑑類までを展示し、これから自然探検をしてみようという皆さんには、きっとためになるものと思います。

（学芸調査員　中村　学）

猛毒のオクトリカブト